

きおくをつなぐ

東日本大震災アーカイブ施設と慰霊の場の研究調査及び提案

インテリア分野 柴崎ゼミ A2201721 学生氏名 早尾桃香

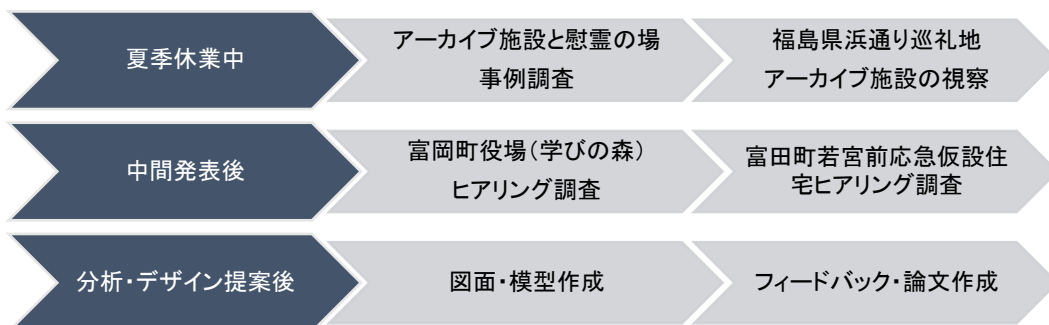
研究の背景

東日本大震災、原発事故からもうすぐ8年の月日が経過しようとしている。また、今年度ですべての仮設住宅が撤去されることになっており、震災関係の情報の減少や記憶の風化はより一層強めることだろう。震災の被害が特に大きかった岩手・宮城・福島では震災の記憶を後世に残していこうと、アーカイブ施設や慰霊の場の設置が行われている。しかし、来客が少ない、震災の遺品を収蔵するスペースがないなど、調査を進める中で複数の問題点が浮上した。このままでは、震災の記憶を後世に残すことが困難になることが予想される。そこでアーカイブ施設や慰霊の場の必要性について改めて考え直し、調査・研究を進めていく。

研究の目的

本研究では、震災の記録をどのような形で、何を後世に伝えることが重要かを見直し、東日本大震災について理解してもらうにはどのようなデザインにするべきなのかを研究・提案する。また、震災を過去のものとして捉えず、終わりの見えない問題としてみてもらうにはどうすればいいのかについての研究を行う。慰霊の場では、提案したアーカイブ施設にふさわしい慰霊の仕方について研究を行う。

計画(研究のプロセス)



その他…文献調査、調査の分析



被災地巡礼

東北お遍路マップを参考に
巡礼地の視察を行った。



アーカイブ施設の視察

展示の内容が震災の前後に集中
し、震災が過去のものとなっている



富岡町役場ヒアリング

資料の保管が難しく失われたもの
が数多くあることが分かった。

成果 ・全体模型 1/50 ・拡大模型 1/20 ・イメージパース

1. 設置計画

震災の記憶を後世に残すことを考え、これからの社会を担っていく若者を中心にアーカイブ施設を設計することにした。そのためターゲットは中学・高校生に絞っている。設置は常設とせず、移動式にすることで居住する地域でアーカイブの作成や展示物を見学することを可能とした。また、富岡町のヒアリングの際に、震災当時の遺品を収蔵する場所がなく捨ててしまう問題があることがわかった。そのため、アーカイブの展示に加えコンテナを使用し、収蔵倉庫の設置も計画することにした。

2. 設置場所

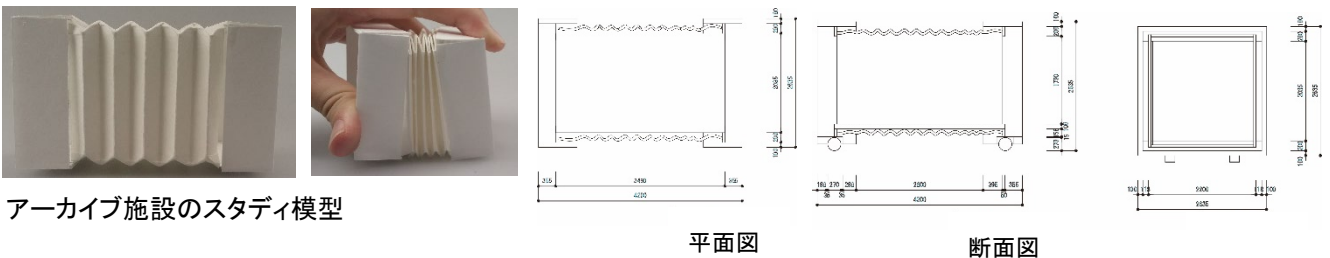
運動公園や農村広場は仮設住宅で使用された場所が多く、本研究の提案でも長期間の設置として再び使用することとする。また、学生をターゲットとしているため、学校のグラウンドでの設置も計画している。

3. 施設

仮設住宅と使用された場所は、敷地の広さが一定でないため場所によって対応できる建物でなければいけない。そこで、人が手動で移動させることができるくらいの四角形に車輪を取り付け、引っ張ることで展示空間がうまれる蛇腹式構造を提案した。また、語り部や映像スペースにはテント膜構造、震災の遺品には収蔵倉庫としてコンテナの設置を行うなど、いずれも人の手で簡単に設置できる施設の提案を行っている。

4. 慰霊の場

以前は仮設住宅として使用された場所を、震災のアーカイブをつくる場所として使われる。そのため、その場所で暮らした人や仮設住宅、また震災のアーカイブへの2つの慰霊を行うことを考えた。アーカイブを行っていく過程で植樹を行い、アーカイブ施設の拠点と仮設住宅があったという2つの象徴として慰霊することを提案する。



アーカイブ施設のスタディ模型

平面図

断面図

考察

研究を通して一番に感じたことは、東日本大震災や原発事故への問題が終わらないまま、震災への風化が進んでいることであった。巡礼地では大量の廃棄物が残され、精神的に体を壊している人が7年以上たった今も存在している。その中で震災を忘れないでほしい、何とかアーカイブとして残したいと懸命に取り組む人も多くいた。私は震災で大きな被災をしたわけでもなく何かを失ったわけでもなかったが、今回の研究でアーカイブ施設や慰霊の場をはじめ、東日本大震災への課題がいかに深く難しいものか考えさせられた。その一方で、デザインや建築の面で震災の記録や傷跡が消えずにすむ可能性もうまれたのではないかと考える。